

【2024年度第1回研究会発表要旨】

アラスカ先住民ヒップホップにみる「抵抗」と「ケア」
—先住民ラッパーAK Rebelの活動を事例に—

野口 泰弥

1970年代にニューヨークで誕生したヒップホップは1980年代までにアメリカ先住民社会に急速に浸透した。アメリカ本土の先住民ヒップホップは主に脱植民地化との関係において議論されてきた。一方で、本土とは植民地化の過程が異なるアラスカ州において、先住民ヒップホップはこれまでほとんど研究されていない。本発表ではアラスカ州における植民地化の歴史、現代の先住民社会の文脈を確認した上で、アラスカ先住民ラッパーであるAK Rebelの活動と楽曲を事例に、アラスカ先住民ヒップホップの特徴を検討する。

1. アラスカ先住民の近現代史

条約の締結により先住民に土地を放棄させた上で、入植が行われた本土に対し、アラスカはロシアによって条約の締結無しに植民地化が行われた。1867年にアメリカ領となつて間もなく、ゴールドラッシュで外部者の大量流入が生じた。ロシア時代に続き、これにより感染症が拡大し、多くの先住民社会が壊滅的な被害を受けた。先住民の土地権の問題は長年、不問にされてきたが、1968年に北極海沿岸で油田が発見され、その開発のために土地問題の解決が図られ、1971年に「アラスカ先住民権益処理法 (ANCSA)」が制定された。

ANCSAは補償金によって民族自決のための経済的基盤を整備し、先住民社会のヘルスケアの改善などに寄与したとされる一方で、アラスカ先住民社会は現在も高いホームレス人口、自殺率、アルコール依存率などの問題を抱えている。この問題の背景にあると考えられているのが、植民地化の歴史と、現在も続く構造的抑圧に起因する「集合的トラウマ」である。先住民社会の問題を解決していくためには経済的援助、制度改革だけではなく、トラウマに対するケアが必要であると考えられている (Roderick 2010 : 68-70)。

2. アメリカ先住民とヒップホップ

アラスカ先住民の伝統音楽はドラムの伴奏を伴うドラムソングなどがある。音楽はエンターテイメントであるだけでなく、狩猟を成功させたりする特別な力を持つとされてきた。1980年代後半には、アメリカ本土の先住民社会から知名度の高いラッパーも登場したが、この時期にアラスカ先住民によるヒップホップが実践されていたかは不明である。2003年頃からアラスカ先住民のヒップホップソングが確認でき、現在は複数のアラスカ先住民ラッパーが活躍している。その中には消滅の危機にある先住民言語で歌うラッパーもおり、ヒップホップは言語復興や先住民文化の再活性化にも寄与していると考えられる。

3. AK Rebelのヒップホップ

AK Rebel (Samuel Johns)は、アラスカ先住民であるアトナとグィッチンの両親を持つラッパーである。発表者は2022年に彼にインタビューを行った。彼は青年時、酒に依存し、

自殺願望もあったが、そこから立ち直った経験を持つ。現在、彼はラッパーとして活動するほかに、先住民のホームレス問題などに取り組む社会活動家でもある。社会活動と音楽の関係について、彼は先住民社会の問題解決には持続性のある社会活動が必要だとして、音楽は問題解決に向けた活動を呼び起こすように「火を点ける」ことができると述べる。

彼の楽曲はメッセージが主に先住民社会の外部に向けられている曲と、内部に向けられている曲に大別できると考えられる。前者の曲では例えば、カリブーの繁殖地を破壊することでグイッチン文化の根底を破壊しかねない、アラスカにおける現代の石油開発問題や、先住民社会に対する主流社会側の無理解への怒りが歌われ、後者の曲では先住民女性のDV被害者や、トラウマに傷つきながらも、心の内を明かせず酒に溺れてしまう先住民男性に、優しく寄り添うようなメッセージが歌われる。「You Know I Love You」という曲において彼は、ドラムによって自文化と繋がることで、アルコール問題を断ち切ろうと先住民社会に呼びかける。インタビューにおいて彼は、かつて自分自身が酒に依存した原因を、肉親の死による悲しみであったとし、かつて先住民社会は他者の死と向き合い、乗り越えていく方法を知っていたが、周囲のアルコール依存や家庭の機能不全により、その方法が失われてしまったと述べる。そして、伝統的なドラムソングとは本来、他者の死と向き合い、みんなで集まって元気になるために行うものであったと語る。

4. 結論と考察

歴史的なトラウマと、現在も続く無理解や構造的抑圧を踏まえると、現在のアラスカ先住民社会は、外部社会に対し「抵抗」や「反論」、傷ついた同胞たちに対し「ケア」を行っていく必要がある状況にある。そして実際に、AK Rebelの楽曲は先住民社会の外部に対しては「抵抗」のラップ、内部に対しては「ケア」のラップになっていると考えられる。

植民地化の歴史は異なるが、トラウマや抑圧はアメリカ本土の先住民社会にも共通している。従って、「抵抗」と「ケア」という要素はアメリカ本土の先住民ヒップホップにも見出せるかもしれない。その中であって、ANCSAに起因する諸問題など、アラスカ固有の文脈が歌われるのが、アラスカ先住民ヒップホップの特徴であると結論できる。

アラスカ先住民の伝統音楽は狩猟を成功させたり、他者の死を乗り越えたりする特別な力を有していた。先住民社会の抱える諸問題を乗り越えるための「火を点ける」ことで、ヒップホップに社会変革の力を期待するAK Rebelの取り組みは、根底的な部分でアラスカ先住民の伝統と繋がっているのかもしれない。

注

1 本発表は野口（2024）に基づく。

引用文献

野口泰弥

2024 「抵抗とケア—アラスカのネイティブ・ラッパーAKレベル」 島村一平（編）『辺境のラッパーたち—立ち上がる「声の民族誌」』青土社、東京、319-347.

Roderick, L.

2010 *Alaska Native Cultures and Issues: Responses to Frequently Asked Questions*. University of Alaska Press, Fairbanks.

（のぐち・ひろや／国立民族学博物館学術資源研究開発センター助教）

古代「エミシ」の社会構造

グルコフスキー アレクサンダー

「エミシ」とは、7～11世紀に日本国家で形成され、正史に記録されている北東北の集団の呼称である。40年間以上、「エミシ」の起源やアイヌ・和人との関連に関する議論が続けられている。歴史・考古学的な研究には、実際の集団を軽視し、「エミシ」が政治的な現象として扱われているという問題がある。本発表では、社会学や文化人類学の理論により、「エミシ」と関連する7～8世紀における北東北の社会構造の形成について検討したい。

【本号「研究ノート」として掲載】

(ぐるこふすきー・あれくさんだー／北海道大学大学院文学院博士後期課程)

キツネか？イヌか？オオカミか？

—アイヌ絵に描かれたイヌ科動物の検討—

梅木 佳代

1. 背景と目的

かつて北海道に生息したエゾオオカミ (*Canis lupus hattai*, 以下オオカミ) は明治期に絶滅した。1896 (明治29) 年から1903 (明治36) 年にかけて毛皮を加工・販売したことを示す記事がその最後の記録とされる (山田 2011 : 150)。道内のオオカミに関しては、明治年間という早い時期に姿を消したこともあり、当時の人々との関係性だけでなく、野生動物としての生態や外見的特徴についても、いまだ明確に把握されているとはいいがたい。

絶滅したオオカミをめぐる過去の実態解明を目指すには、新たな資料の把握を目的とした調査・収集を進めるとともに、既存の資料や議論を見直し、従来は利用されてこなかった記録や情報の再評価を試みることも重要となる。本発表は、画家・西川北洋による「明治初期アイヌ風俗図巻」 (函館市中央図書館蔵) の「アツシ織り」図中に描かれた動物がオオカミである可能性を提示し、そのうえで (1) いわゆる「アイヌ絵」に描かれたイヌ科動物の同定方法、および (2) 同図に描写された場面から読み取ることができる人との関わりについて議論することを目的として行った。

2. 方法

本発表では、佐々木 (2004 : 27) が定義する「広義のアイヌ絵」に分類される絵画からイヌ科動物の図像を抽出し、上記「アツシ織り」図中に描かれたイヌ (*Canis lupus familiaris*, 以下イヌ) 様の動物と対比させることで、当該動物の種類を検討することを試みた。当該動物の図像は、従来は「犬」 (小林 2002 : 11) とみなされてきたようであり、明確に種類を検討した事例を見出すことはできなかったが、アイヌ絵における一般的なイ

ヌの描写と比較した際に、①濃い灰色の毛色、②垂れ尾、③黒い尾先、の3点が特異点となる可能性が考えられた。

比較対象については、北海道に生息するイヌ科動物のうち、オオカミ、イヌ、キツネ (*Vulpes vulpes schrenckii*, 以下キツネ) とし、アイヌ絵にあらわれるそれぞれの図像の集約に取り組んだ。北海道に生息するイヌ科動物は4種だが、大きさや外見上の差異から他3種と混同される可能性が低いエゾタヌキ (*Nyctereutes procyonides albus*) は、本発表段階の検討からは除外した。これらの動物の図像は、博物館が刊行する展示図録やアイヌ絵を専門とする研究書、「函館市中央図書館デジタル資料館」をはじめとするインターネット上のデータベース等に掲載・公開されているアイヌ絵を閲覧して抽出した。

3. 結果・考察

アイヌ絵から抽出できたイヌ科動物の図像は、イヌが92例、オオカミが3例、キツネが2例となった。なお、可能なかぎり原図を対象とし、動物の表現がおおむね引き写しとなっていると判断した模写作品はまとめて1例とみなした。

結果として、キツネ、オオカミの事例は限定的であり、それぞれの描写における特徴や識別点を決定づけるにはいたらなかった。ただし、多数の事例を収集することができたイヌの図像と比較した場合、キツネについては尾の形状と毛色から区別できる可能性がうかがえた。一方、オオカミでは、3例中1例がオオカミを白毛の獣として描いているなど、後述するイヌの図像との共通性がより高くなると思われた。

イヌの図像を集約すると、毛色と尾の描写にまとまりがみられた。毛色については、92例のうち白毛が51例(約55%)、白と黒ないし白・黒・茶色のまだら模様が18例、赤毛が14例、灰毛が8例、毛色不明(判別できない大きさの図像だったため)が1例だった。尾の形状については、巻き尾が92例中70例(約76%)を占め、細長い尾(ネコの尾に似る)が6例、形状不明(仔イヌあるいは他個体と重なって描かれているなどで確認できない)16例となった。

上記の結果をふまえて「アツシ織り」図中に描かれた動物をみると、当該動物は尾の形状において一般的なイヌではないといえることができる。また、画面全体の目立つ位置に配置されていることから、特異な動物であることを描き手が意図的に示している可能性があり、イヌであると無条件には断定しがたいと考える。

斉藤(1984: 54-55)および西川(1942)によると、西川北洋は明治期から昭和初期にかけて釧路、弟子屈、日高、根室、旭川地方に居住あるいは赴いたことがあるという。このうち旭川には、明治期にアイヌ民族がオオカミの幼獣を飼育していたと言及する記録が複数存在する。「アツシ織り」図中に描かれたイヌ様の動物がオオカミであるならば、アイヌ民族による飼育の様子を知る重要な手がかりとなりうる。

本発表では、前述した理由から検討対象をオオカミ、イヌ、キツネの3種としたが、会場からタヌキおよびオオカミとイヌの雑種の可能性についてご指摘をいただいた。今後は、これらの動物である可能性も念頭に置きつつ、対象事例をさらに拡充できる可能性が高いイヌの図像を中心として調査・収集を継続し、個々の動物の描写にみられる特徴をより具体的に把握すること、また、基準を明確に示した議論に取り組むことを意識して検討を続けていきたい。

引用文献

小林孝二

2002 「描かれたチセの姿」北海道開拓記念館（編）『描かれた北海道：18・19世紀の絵画が伝えた北のイメージ』北海道開拓記念館、札幌、10-11.

斉藤健二

1984 「西川北洋の絵」『旭川市民文芸』26:54-55.

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』草風館、浦安.

西川北洋

1942 『アイヌ風俗絵巻：天然生活と資源の活用』トミヤ出版部、旭川.

函館市中央図書館

—— 「函館市中央図書館デジタル資料館」 <https://archives.c.fun.ac.jp/>（2024年7月22日閲覧）.

山田伸一

2011 『近代北海道とアイヌ民族：狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会、札幌。
（うめき・かよ／北海道大学・大学院文学研究院）

文化とヒューマニズム：

構造とエージェンシーの統合を視野に入れた研究に向けて

野口 明広

本発表は、1990年代に行った南部パラグアイ日本人移住地における機械化農業の展開と、日本人移住者の『日本人』としてのエスニックアイデンティティとの関連性についてのフィールドワークに基づく研究成果を理論的に昇華する研究の中間報告である。

南部パラグアイ日本人移住地では、1950年代から熱帯降雨林の開拓が日本人移住者によって行われ、1990年代には機械化された農業技術を用いて大豆と小麦を二毛作する大規模農業が営まれるまでになった（野口2003）。

同時に「日本的」な生活様式の維持継続が熱心に行われていた。彼らは『日本人らしく』振る舞うことに大きな注意を払っていた。日本人移住者は『日本人』としてのアイデンティティを確認し合い、結束することを通じて機械化畑作農業の確立を成し遂げることが出来た。こうした事情をCohen（1974）が論じた理論を参照して説明した（野口2003）。

本発表では、Cohen（1974）の理論的背景を掘り下げ、Turner（1977）やチクセントミハイ（2000）の議論との関連性を論じた。

次いで、彼らの議論とAlthusser（2001）のイデオロギーを巡る議論とを比較して検討した。

さらに、E.P. Thompson（1977）の文化とHuman Agencyを巡る議論とCohenのエスニシティを巡る議論とを比較して検討した。

こうした検討を踏まえて、南部パラグアイの日本人移住地社会の成立史を、広範な社会経済的な構造による影響とそれに抗い自分たちの農業経済の確立に向けて発揮された日本人移住者のHuman Agencyとの両者を統合した視点（Roseberry 1988）から描く可能性について論じた。

引用文献

Althusser L.

- 2001 “Ideology and ideological State Apparatus” *in* *Lenin and philosophy and other essays*. Monthly review press.

Cohen A.

- 1974 *Two-Dimensional Man: An Essay on the Anthropology of Power and Symbolism in Complex Society*. Routledge and Keagan Paul.

Thompson E. P.

- 1977 “Folklore, Anthropology, and Social Theory” *The Indian Historical Review* 3(2).

TURNER V.

- 1977 “Frame, Flow and Reflection: Ritual and Drama as Public Liminality” *in* *Performance in postmodern Culture*. Benamou M. Caramello C. eds Center for twenty century studies pp.33-55.

Roseberry W.

- 1988 “Political Economy” *Ann. Rev. Anthropol.* 17 pp. 161-85.

チクセントミハイ・M.

- 2000 (1975) 今村浩明 (訳) 『楽しみの社会学 (改題新装版)』新思索社、東京.

野口明広

- 2003 「商品の流通と開拓移住地社会」『アジア経済』44(1).

(のぐち・あきひろ)

【2024年度第2回研究会発表要旨】

近世史料にみる北海道の低緯度オーロラ

シン ウォンジ

歴史的オーロラの研究は、近年、歴史学と宇宙科学の協働による文理融合研究として展開され、その成果を蓄積しつつある。近世においては、明和7年に北海道を含む日本各地で観測されたオーロラが代表的である。北海道はその地理的位置から、過去にも低緯度オーロラの出現および観測が多く期待される。本発表では、北海道に関する近世史料において、オーロラと思われる記録を紹介し、それに対する当時の人々の認識について考察する。

【本号「論文」（共著）として掲載】

(しん・うおんじ／国立アイヌ民族博物館)

アイヌ民族資料の形状比較・形状差観察へのX線CTの応用

大江 克己・竹内 隼人・八幡 巴絵

1. はじめに

コンピュータ断層撮影装置（X線CT 以下、CT）は、調査資料に360°方向から照射したX線を捉え、三次元的な画像を再構成し表示する機器である。CTは、非破壊での断層観察や三次元モデルによる立体観察を可能にするため、国内では美術工芸品や埋蔵文化財など多くの文化財の調査で利用されている。国立アイヌ民族博物館ではアイヌ民族資料を中心に、CTによる調査の利用幅の拡大に向けた研究を進めてきた。

アイヌ民族資料を含む文化財へのCTの利用は、主に内部観察や状態診断が目的にある。一方、産業や医療等のCTの利用は内部観察に加えて、測定対象の変化や違いを視覚的に把握するデータ解析技法を併用した観察が発達している。CTデータの解析技法をアイヌ民族資料への利用を考えると、中でも偏差解析の観察への応用が期待が予想できる。偏差解析は、測定対象の内部情報と共に寸法情報を保持するCTデータの特性を用いた方法で、2つの異なるデータを積層させることで形状比較を行い、その形状の差を偏差として数量的に捉え、三次元モデル上に色で分布し観察できる。アイヌ民族資料の中には、宝刀や小刀などで見られるように近似した形状の資料も多く、生産や製作の背景などを考える上で要点となる属性である。しかし、目視調査や部分的な計測などの従来の観察法では、資料全体の形状差を定量的に把握することは困難でもあった。形状比較、形状差観察への偏差解析の応用は、従来以上に具体的な形状の観察が期待でき、形態分類や変化の調査、規格・模倣などの生産背景の検討など、調査や診断等への寄与が見込まれると推測する。そこで、本発表では、アイヌ民族資料の形状比較・形状差観察へX線CTの応用として、偏差解析の効果について検証した。

2. 使用装置及び検証資料等

使用装置は、国立アイヌ民族博物館設置のCT（コメットテクノロジーズ・ジャパン株式会社製 Y.CT Modular）を用いた。CTデータの解析には、解析ソフト（VOLUME GRAPHICS社製 VGstudioMAX3.3座標計測+設計値/実測値比較モジュール）を使用した。

偏差解析の検証は、形状が近似する資料の中でもCTの測定がしづらい資料で効果が判定できれば様々な資料に転用できる可能性が高い。そこで、近似形状の宝刀の柄（金属装）2点を用いた（図1-1、図1-2）。いずれも国立アイヌ民族博物館の収蔵品である。



図1-1. 柄1(金属装)の外観



図1-2. 柄2(金属装)の外観

3. 検証結果

柄1（金属装）と柄2（金属装）を用いた調査について、基準資料を柄1、比較資料を柄2とし、柄口を基準にCTデータを整列させて偏差解析を実施した。なお、装飾差は除外し観察している。画像は印刷の関係でモノクロ表示とした。

調査結果を図2に示す。図2より、形状の違いが少ない灰色部分が大半を占め、全体寸法や湾曲角度はほぼ同じ様子が確認できる。ここから、偏差解析は資料全体の形状の違い

を視覚的に把握可能なことがわかる。ただし、立体データのため微細部分の具体差は把握しづらい。そこで、中央断面で偏差解析を行い結果の観察をした。

図3に調査結果を示す。図3より、柄口下端付近は3.0mm前後、柄尻先端に1.1～1.5mm程、湾曲角度に1.8mm程の差が確認できた。形状差が観察できる箇所には、外側や内側にラインを表示し観察の焦点を絞った形状比較も可能であった。

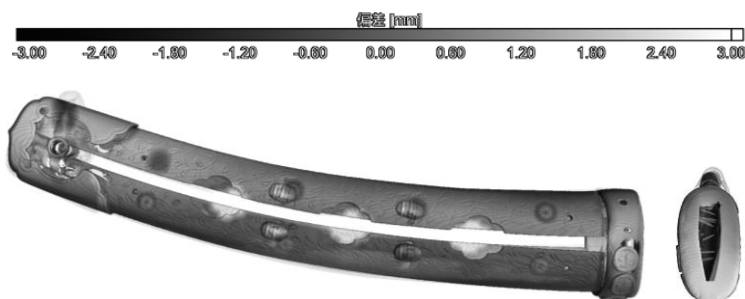


図2. 偏差解析結果(左：全景 右：柄口正面)

※柄2(比較資料)は半透明表示

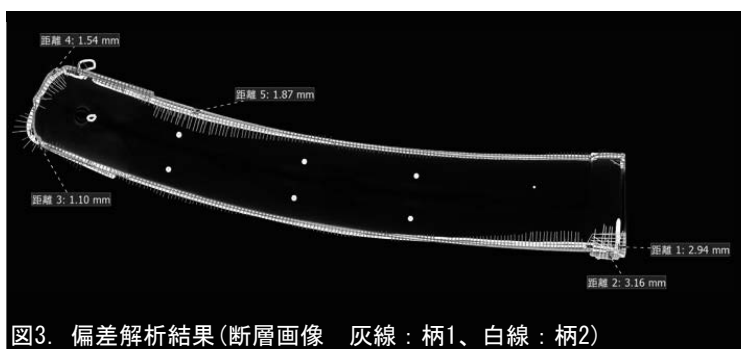


図3. 偏差解析結果(断層画像 灰線：柄1、白線：柄2)

図2と図3の結果を合わせると、偏差解析はCTデータ間での資料間の形状を概率的に比較する効果が高く、断層面での解析を併用することで、形状差をより詳しく把握する効果的な観察が可能と言える。

4. 用途

偏差解析の効果を検証した上で用途を具体的に考えてみる。資料全体の形状比較と形状差の採寸が可能なことから、形態分類や形状変化の観察に効果を発揮することが予想できる。構成部材もデータ上で取り出して偏差解析が可能のため、従来以上に形状の違いや変化を知る観察法として応用できる。また、多数の資料を解析することで、形状の近似性を視覚的、数量的に把握できることも用途として大きい。アイヌ民族資料の中には宝刀などで見られるように、全体形状に近い資料や近い形状の装飾を付す資料が知られる。時期によっては、規格や模倣など製作規則の存在が背景に予想されるものの、資料自体から情報を得ることは困難であった。形状の近似性を視覚的、数量的に把握可能な偏差解析は、現状の調査へ寄与すると予想する。偏差解析は、アイヌ民族資料の具体的で視覚的な形状比較・形状差観察へ応用が可能と考えられた。

※国立アイヌ民族博物館令和6年度調査研究プロジェクト「アイヌ民族資料の科学的保存に関する臨床的研究」(2024A01)の成果を含む。

(おおえ・かつき、たけうち・はやと、やはた・ともえ／国立アイヌ民族博物館)

現代の手作り漬物に見る食のコミュニケーション

—自己表現と生きがい化を中心に—

一色 紗矢香

現代における漬物を介したコミュニケーションおよび自己表現を明らかにすることを目的とし、後志管内およびオホーツク管内において、小樽市総合博物館所蔵の古写真を適宜用いながら半構造化インタビューを行った。漬物作りが義務や年中行事から趣味へと変化したことで生きがい化が進み、漬物それ自体も冷蔵食品として定義が捉えなおされつつある。一方で、生産者と消費者という両義的な立場での相互コミュニケーションと自己表現が現在も変わらず行われ、また共食の場の創出にも繋がっていた。

【本号「研究ノート」として掲載】

(いっしき・さやか／小樽市総合博物館、北海学園大学博士後期課程)

〈育て合う〉多文化教育

—札幌大学ウレシパクラブのエスノグラフィー—

岡田 勇樹

アイヌ民族は日本の先住民族である。2008年に衆参両院において全会一致でアイヌ民族は日本の先住民族として認められた。それはつまり、マイノリティであるアイヌ民族とマジョリティである和人は異なる民族であり、その関係性においてアイヌ民族の先住性を和人が認めたということになる。いうまでもなく、2つの民族間の関係性において先住民族ということであり、時代を遡って、その土地に一番先に居住していた民族という意味ではない。

アイヌ民族が日本の先住民族と認められるに至るまでには、多くの問題があった。アイヌ民族の暮らした土地が「北海道」として正式に国土として組み込まれ、アイヌ民族は生活や文化を否定され「和人化」することになる。その結果、文化継承においても大きな被害を受け、差別も発生し、経済的にも貧困に陥るケースも少なくなかった。それらは現代にも連なる問題である。

2008年にアイヌ民族が日本の先住民族として認められた2年後、札幌大学は「ウレシパ・プロジェクト」を開始した。ウレシパ・プロジェクトに含まれる「ウレシパ奨学金」（アイヌ民族の子弟向けの奨学金）については学内からも「逆差別」だという反対の声もあったが、市民や企業を巻き込んで「育て合い」を発信するシステムは先駆的な取り組みだったといえる。そのウレシパ・プロジェクトの活動母体である「札幌大学ウレシパクラブ」の事例を通じて、現代日本におけるアイヌ民族に関する多文化教育のあり方を考察する。

ウレシパクラブの活動は同クラブのリーフレットによると①「アイヌ民族の歴史や文化を深く学習・研究するとともに、アイヌ文化振興のための活動を担うことを通じ、アイヌ民族の社会や文化に対する理解を促進」、②「日常的かつ継続的な学習・実践活動によって、アイヌ民族の時代を担う優れた人材を育成するとともに、様々な協力支援体制の構築によって、将来の社会的活躍の場の提供を図る」、③「多文化理解に基づく信頼関係を構築し、多様性に満ちたコミュニティーモデルを創造するとともに、対外的に発信」とあるが、その学びは「アイヌ文化」だけにとどまるものではない。

ウレシパクラブは多くの活動を学生が担っており、その学生にはアイヌ民族の学生と、そうでない学生（和人）がいる。ウレシパクラブにアイヌ民族の子弟が含まれることで、アイヌコミュニティに受け入れてもらうことが容易になる。また、海外などの先住民族を訪問することが可能になったり、受け入れについても要請がくることもある。そういった環境を日常化することで、より深く他文化を学び、多文化も学ぶことができるのである。そういった意味でもウレシパクラブはアイヌ文化学習を中心としつつも、他文化化は必然だといえよう。

ウレシパクラブは様々な賞を受賞するなど、社会的にも評価されている。しかし、元々はより大きなムーブメントを担う団体の1つになることが想定されていた。他大学でも同様の取り組みが同時多発的に発生するはずだったが、実際にはそれは実現しなかった。そ

れから15年余りが経った。ウレシパクラブは様々な課題に対応しつつ、変化しながら活動を続けてきた。その間、多くの人材を輩出し、そのすそ野は広がりつつある。15年前には見られなかった「育て合い」の次のステップに進む可能性を内包していることは間違いないだろう。

引用文献

一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ

2013 「札幌大学ウレシパクラブ」(リーフレット)

(おかだ・ゆうき/北海道大学大学院文学院・博士後期課程)

コロナ禍前後の「川下八幡神社例大祭」の比較

坂本 渚月

まず初めに、民俗学研究における柳田国男・折口信夫・米山俊直らによる祭り研究の着眼点の変遷をレビューし、現在では、祭りの起源の探求というよりはむしろ、当事者・祭りの担い手の自己・相互形成プロセスを重視する流れが主流となっていることを明らかにした。それを踏まえ、本発表では、前者に相当する文字記録の少ない川下八幡神社例大祭の様式面についての概要と後者の自己・相互形成に着目し、発表を行った。

調査対象地である石狩市浜益区は、平成の大合併の際に石狩市と合併し、石狩市の北部一帯を占める地域となった。基幹産業は農業・漁業で、その他に土木も盛んである。また、10年で466人の人口減少があり、顕著な人口減少がみられる地域となっている。

浜益区川下地区は、浜益区全13地区のうちの1つである。この地域はかつて荘内藩の陣屋が置かれた地域であり、それが例大祭の内容に大きな影響を及ぼしているという特徴がある。

祭りの概要としては、荘内藩が陣屋を川下に置いた後、1862年に荘内地方より祭神遷宮が行われて神社が陣屋内に置かれ、例祭日が8月15日と定められた。以降も例大祭は続き、村社への昇格と現在の場所への建築遷宮、奴ふり道中の隊列への編入など様々な変遷を経て現在に至っている。

今回の研究テーマに川下八幡神社例大祭を取り上げた理由は、幼少の頃から身近なものであったこと、例大祭の継承に対する問題意識があったこと、郷土への恩返しとして記録の少ない例大祭に関する体系的な記録を残したいと考えたことの3つである。

研究の目的は2つある。1点目が例大祭の概要を把握し、コロナ禍前後での内容面の変化を調べ、コロナ禍による影響の有無を考察することである。2点目が例大祭にみられるインフォーマルな学びに着目して、例大祭を地元の人々がどのように思っているか、今後どうしていきたいかを明らかにし、例大祭の意義を探ることである。調査方法は、実地調査、聞き取り、映像資料・文字資料の収集による。

例大祭の様式面の特徴は露払い、奴ふり道中、神輿、猿田彦、太刀持ち、荘内神楽、南部獅子舞、花笠音頭、稚児・稚児付きという要素によって渡御の隊列が構成されていることである。また、コロナ禍前後での比較では、私が参加した2018年、2024年と、2020～

2022年のコロナ禍中でどのような変化があったかを現地調査によって明らかにし、表などにまとめた。

例大祭の意義については、渡邊洋子による祭りの人間形成機能に着目した分析にもとづき、その意義を探ることとした。渡邊は、例大祭の担い手や参加者にとって様々な場面で共有される時間幅をもった生涯学習的な学びの要素を「祭りに向けて」「祭りのなかで」「祭りを通して」の3つに区分して考察しており、本研究にとって多くの示唆を与えてくれた。この3観点を、実際に例大祭にあてはめ、発表者の経験と参加者へのインタビューを通じ、例大祭の意義を探ることとした。

以上のことから、以下の3点が明らかとなった。

1. 現在の例祭日が平日か休日か問わず8月14日・15日であることと、奴ふり道中や神輿、荘内神楽、南部獅子舞など9つの要素によって渡御の隊列が構成されている。
2. コロナ禍前後の祭りの変化を詳細に検討した結果、2020年～2022年にかけては簡略化があったことや人手不足、地域の過疎化が祭りの規模縮小の主な原因であることが判明した。
3. 祭りの担い手や参加者に共有される生涯学習的な学びの諸要素を、祭りの前・中・後という3段階ごとに、発表者の実体験を中心にそれぞれ抽出することができた。

引用文献

渡邊洋子

- 2013 「グローバル・ローカルな学びとしての伝承・伝統文化—日本の「祭り」を手がかりに」
相庭和彦、渡邊洋子（編著）『日中韓の生涯学習—伝統文化の効用と歴史認識の共有』
明石書店、東京、44-73.

（さかもと・なつき／北海学園大学）

樺太アイヌの英雄詞曲ハウキのテキスト

資料概要と特徴について

北原 モコットウナシ

アイヌの英雄詞曲については、20世紀に入ると北海道の日高地方西部と胆振地方を中心に研究が蓄積され、90年代には日高地方東部や釧路地方の資料の整理が進み、主要なモチーフや成立史について、新たな観点から議論がなされた。

樺太の英雄詞曲ハウキについては、東海岸トンナイチャの男性話者によるテキスト（『北蝦夷古謡遺篇』金田一京助により1907年筆録、1914年公刊）が知られている。また、1943年頃におそらく女性の話者によって語られた「海馬嫁」というテキストがある。前者はアイヌ語原文対訳、後者は知里真志保による和文要約が1948年に公開されている。後者については、佐々木弘太郎筆録のアイヌ語原文テキストが残されており、2009年に発表者が原文対訳を公開している。このほか、B.ピウスツキが1903年頃に筆録した6篇のうち1篇を英訳で発表していたものが、近年になり新たに和訳・紹介された。しかしながら、樺太におけるハウキの実態を知るには、資料が乏しい状態が続いている。発

表者は、北海道立図書館に保管されるマイクロフィルム化された金田一京助ノートを調査し、金田一が上記のテキストを発表した後の1915年8月～9月に、樺太東海岸で7人の男性話者による14篇のハウキ（断片を含む）を筆録したことを確認した。本発表では、金田一資料の保管と整理の状況および、数編について出現語彙やストーリーの特徴を紹介した（筆録時期の順に従って発表者が付した仮番号では第2、第6、第11、第14篇）。

語彙については、日常語では用いられない北海道方言と共通する語彙や（cipapa「首領」、nesi「強調の副助詞」、arino kanne「というふうに」、ta koracino「このように」、imakakewano「その次から」、cikatunaska「救援に行く」）、特殊な人称変化（an=itah「私は話す」、an=inkara「私は目をやる」、an=payc「私は行く」）が見られることを紹介した。

内容について、ここでは第2篇を例示する。視点人物はオタスフ村の少年、モイサム村の少女、他に主要なキャラクターとしては育てのおば（ポネンルム村の女）が登場する。少年がおばに育てられ、食料が尽きたのでウバユリを掘りにいく。二人で作業をしている所を何者かに巫術の息吹で襲われ、二人ともとられる。気が付くと、姉（おば）は縛られて、拷問されている。（語り手が少女に代わり）少女は一人きりで、巫術の力で成長した。ある日、巫術をしたところ、少年たちの危機を目撃し、おばに同情した少女は、涙を流して救援に向かう。のちに、悪漢たちは少女の仇でもあることがわかった。悪漢は村中の者を集めて襲ってくるが、巫術の力で攻撃をかわし、女の刀と息吹によって悪漢たちを倒し、少年とおばを救出した。

先行研究において、北海道の英雄詞曲に表れる主人公たちの多くは（しばしば富裕な）孤児であること、並外れて優れた身体性と幼い情緒を持ち、異性愛がストーリーの基底にあることが指摘されてきた。また、2023年には発表者が日高地方沙流川流域の英雄詞曲ユカラを、林姝姪が胆振地方幌別のユカラを、フェミニスト批評の手法で分析し、男性は好戦的で女性は支援や癒しを担うこと、特に必然性のない場面で、女性（稀に男性）の身体がなまめかしく描かれる「サービスシーン」の存在、異性愛と結婚を必然とする価値観を基底とし、無垢で従属的な女性は主人公の側に、好色で主体性を持つ女性は敵対者に振り分けられるなど性差が固定的に描かれることなどを指摘した。

こうした特徴は、既刊のハウキのテキストや本発表で扱った資料にも共通する。金田一資料のうち第2篇の特色としては、終始女性が主体となって事態を收拾していることのほか、女性が戦いに赴く動機が「襲われた少年の救援と育てのおばへの共感」といった支援的な物であること、女性が優美な武器や楽器・巫術を主体とした戦いをすること、育てのおばに対する拷問は、前述のサービスシーンに当たると考えられることなどが挙げられる。そのほかのストーリーとしては、動物神（キツネ）や敵対者が叙述する話（第6篇と第14篇）、主人公の協力者としてキョトモシリカムイ（京都？の首長）が登場する話（第11篇）が見られた。

引用文献

欠ヶ端和也

- 2019 「『金田一京助アイヌ語スクラップブック』について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21:1-31.

北原次郎太

2009 「樺太西海岸多蘭泊のhawki『海馬嫁』のテキスト」『itahcara』6:49-68、itahcara刊行会、北原モコットウナン

2023 「ヤランガに雁のとまる時 アイヌ文学とジェンダー」『Arctic Circle』127:12-13、一般財団法人北方文化振興協会、

斎藤美奈子

2001 『紅一点論』ちくま文庫、東京、

田村将人

2001 「(覚え書き) 樺太アイヌにおけるイヌの『供犠』」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4:168-186、

知里真志保

1973 「樺太アイヌの説話(二)」『知里真志保著作集1』平凡社、東京、373-389、

林誠

2007 「〈資料紹介〉北海道立図書館所蔵マイクロフィルム『金田一京助採録ユーカラ・ノート』の細目次」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13:55-129、

ピウスツキ・プロニスワフ

2022 阪口諒(訳)「アイヌのフォークロア」阪口諒(編)『アイヌ文学の文献学的研究1』アイヌ語文学研究会、千葉、197-207、

林妹彪

2024 「アイヌの英雄詞曲に見る女性像について」北海道立北方民族博物館(編)『第37回北方民族文化シンポジウム網走 北方諸民族文化とジェンダー2』一般財団法人北方文化振興協会、網走、39-44、

(きたはら・もこっとうなし/北海道大学アイヌ・先住民研究センター)